

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520292

研究課題名(和文) 18－19世紀の英語語彙と文体：理性・道徳・感情に関する概念の表現

研究課題名(英文) Vocabulary and Style of 18th and 19th Century English: With Special Reference to Words Expressing Reason, Moral and Emotions

研究代表者

松谷 緑 (MATSUTANI, Midori)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：70259737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は18世紀から19世紀の後期近代英語の語彙に注目し、当時の社会的背景を踏まえ、その意味を明らかにするものである。

理性・道徳・感情に関する語彙を取り上げ、そういった抽象語が文学作品において、価値の重層性を描き出すのに効果的に機能することを指摘し、小説の登場人物の人物像の形成やアイロニーの構築にも貢献していることを明らかにした。

また、評価的意味を表す語は、その内容的意味が時代とともにますます曖昧になり、使用者の主観を反映し、文脈に依存する傾向を強めること、また、一人の作家においても、書簡と小説とで語の用いられ方に異なる点が観察されることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I examine language in the novels of female writers such as Jane Austen and see how the characters are created and developed in the novel. For example, Phillipps (1970: 59-61) states that one of the most interesting words in Austen's vocabulary is mind. Definitions of mind range from intelligent power and memory to inclination or sentiments, and the meaning of the word in the text largely depends on the context. I illustrate what kind of adjectives or adjectival nouns are used along with mind and which character uses the expression in the novel. These collocations reveal how the word is effectively used in characterization.

This study also contributes to the philological study of the English language, especially the vocabulary of late Modern English. I focus on the words in a state of change in its semantic prosody, from positive meaning to negative meaning, and describe them considering the social context of the time of late Modern English.

研究分野：英語学

キーワード：近代英語 語彙研究 英国小説 オースティン

1. 研究開始当初の背景

研究者はこれまでに、語法・統語といった側面の研究を重視し、近代英語の構造を記述し明らかにすることに取り組んでいる。18世紀に急速に発達した散文学である小説、特に女流作家に注目し、当時の女性の英語を分析し、ある程度の成果をあげた。平成17年度より平成19年度の3年間にわたっては科学研究費補助金(基盤研究(C))の助成を受け、「18-19世紀の英語散文テキストの言語と文体: 当時の女性が用いた英語の特徴を探る」と題して研究に取り組んだ。

(1) これまでに、モダリティ、助動詞、進行形についても考察を行った。法助動詞と法副詞の共起関係に注目し、'Language Expressing Modality in Jane Austen's Novels: With Special Reference to Auxiliaries and Adverbs,' (『独創と冒険: 菅野正彦教授退官記念英語英文学論集』英宝社, 145-158, 2001.) を著した。また、近代英語期に助動詞 *do* が使役の意味から迂言的な用法へと発達していく過程における意味の重層性について、'Notes on the *Did Do* + Infinitive Construction in Late Middle English: with Special Reference to the Writings of Caxton,' ((共著)『英語英文学研究』44, 93-106, 2000.) としてまとめた。さらに、'ing 形の発達と機能について、'『This is being serious』型構文再考』(『言語研究の潮流-山本和之教授退官記念論文集』開拓社, 261-271, 1999.) 'Expanded Forms in Jane Austen's Novels: With Special Reference to Verbs of Mental Process,' (『A Love of Words: English Philological Studies in Honour of Akira Wada』英宝社, 267-284, 1998.) で考察した。また、学会での発表や、研究会での定期的な報告も行った。

英語史の視点からすれば、18世紀から19世紀は、すでに統語的な体系については、進行形や受動態のような詳細な整備を除けば、現代英語への枠組みをほぼ完成させつつあると見てよい。これまでの研究は、近代英語から現代英語へ文法構造が整備されていく過程を明らかにすることに貢献したものとと言える。

(2) 一方で、近代後期は、語彙の意味変化において、語が持つ好ましいあるいは好ましくない意味、すなわち評価的な意味も含めて、注目すべき多くの課題を残している。言語の実態を捉えるには意味の世界も明らかにして行く必要がある。この点において、これまでの当該分野の研究は、国内外において、充分になされているとは言い難い。そこで、本研究では、語彙面に重点化する。本研究が扱う時代の英語は、歴史的に現代の英語に近い分、現代流の解釈で済ませてしまう誤解を招いている場合がある。文献学的英語学の分野

で18世紀から19世紀の時代の英語については特に語彙面で明らかにされるべきことがまだ多く残っており、その分野に貢献する。

2. 研究の目的

本研究は、英語史上近代英語後期と呼ばれる、18世紀から19世紀の時代の英語の姿を探る。現在の英語の体系を完成させるに至った最終的段階と言える時期の英語の特徴を記述し、現代英語の体系の成立過程、特にそのファイナルステージを実証的に明らかにするものである。本研究は語彙面に重点化し、その分野の解明に貢献する。

18世紀から19世紀の英語の語彙に注目し、具体的な分析項目としては以下の点について明らかにする。

(1) 理性・道徳・感情に関する概念を表す抽象語の分布体系、意味変化を記述する。

(2) 語彙の意味変化は、語彙体系それ自体の持つ内的な要因もさることながら、社会的な価値観を反映するものである。従って、本研究では、当時の社会の変化についても考察し、社会背景・思想といった言語外の要因が言語に与えた影響を明らかにする。

(3) 当時の散文学の英語を言語資料として、登場人物の形成にどのように貢献しているかを明らかにする。そこに用いられている英語語彙において、男性と女性の言語使用にどのような差違が認められるのか、また、共通点として言える時代的特徴はあるのか、あれば、どういったことか。

上記の課題に取り組むに際し、英語学と英文学の融合による独創的な認知的視点を導入する。文学作品・書簡・作家の手記などを英語学的に分析することにより特に日本国内において、従来、個別に捉えられがちであった英語学と英文学の両分野の視点を融合し、それによって可能となる、言語に密着した文学論・詳細な言語記述に基づいた新しい英語文体論の構築を目指す。

文学作品の理解を深めるとともに、英語の通時的研究への貢献をめざす。18世紀から19世紀にかけての近代英語後期と呼ばれる時代は、現在の英語の体系を完成させるに至った最終的段階とも言える重要な時期である。本研究は、現代英語と近代英語後期の差違を明示しようとするものであり、英語の歴史における近代英語の位置付けをより明らかにする成果が期待され、英語史研究に大きな貢献となる。

また、18世紀・19世紀を舞台とする社会言語学的アプローチを試みる。本研究が分析対象とする、理性・道徳・感情に関する概念を表す抽象語は当時の社会状況を背景とした言語使用者の認識を反映するものであ

る。語の評価的意味は、辞書の記述によってある程度は予測できるが、意味変化の過程においては、重層的であり、それぞれの使用の場面における解釈は、コンテクストを無視できない。時代を遡っての社会言語学的アプローチも本研究の特色となる。

3. 研究の方法

18世紀 19世紀の後期近代英語の言語を詳細に調査し、理性・道徳・感情に関する概念を表す抽象語の各語の意味変化、類義語の意味領域の分布を明らかにする。文学作品のみならず、書簡やその他の手記の言語にコーパスを拡大する。コーパスは入手可能なものは電子テキストを用いるが、適切なものが電子テキストで得られない場合は、書籍体によるものを使用する。また、数量的な分析のためには、必要に応じて、コンコーダンスや電子コーパスを使用する。

それぞれの語彙の意味を明らかにするためには、そのコンテクストへの考察が必要である。狭義でのコンテクストすなわち文脈は、テキストを丁寧に読み解き言語上の分析を行う。一方、語の意味の分析に不可欠な、当時の社会背景や人々の宗教的/道徳的/倫理的認識についての文献資料を収集する。日本で得られない必要な文献は英国のポドレアン図書館(オックスフォード大学)や英国図書館等で閲覧をする。その際、研究者との協議も行う。

4. 研究成果

(1) 日本オースティン協会において、「Emmaにおける理性・道徳・感情に関する概念の表現」と題し、発表した。英語の歴史において近代後期といわれる時代の英語の解釈においては、現代流の解釈では誤解を生む可能性があるが、この課題に関して、語彙面の解明に貢献するものである。『エマ』を中心としてJane Austenの作品において、登場人物がどのように描き分けられているかを、mind, temper, elegance, condescensionなど、理性・道徳・感情に関するいくつかの語彙に注目して考察した。

『エマ』という小説において、作家の語りは非常に頻りに主人公エマの視点に重なり、周りの人物達がエマの観察により描きだされる。エマは観察する者であり、また一方で読者から観察される者でもある。エマが気づかない間違えを読者が気づくこともある。読者はエマが成長し自己認識を深めていく過程を見守る立場ともなる。作品が著された当時の英語の語彙体系における単語の意味変化をたどることは作品理解にも有意義である。

時代を背景として、意味の幅を持つ mind の多様なコロケーションや、評価的意味が揺れその解釈に幅を持つ condescension といった語が効果的に用いられ、『エマ』の登場人物の人物像の形成やアイロニーの構築に貢

献していることを具体的に示した。価値の重層性を描き出すのに抽象語が効果的に機能することを指摘し、小説の登場人物の人物像の形成やアイロニーの構築にも貢献していることを明らかにした。

(2) 今日、私たちが英語を使って会話をする際、niceという語は、非常に頻りに用いられるものである。とても簡単で短い語で、何かについて「よい」というような好ましい評価をする際に便利である。一方で、その良さはぼんやりと表現されており、どんな風がいいのか具体的な内容に乏しく、文脈に依存することになる。少しあらたまった書き言葉では用いるのを避け、具体的な評価を表す言葉を用いるのが良いとされる。

「英単語 nice の意味を探る : Nice it does for every thing」と題した論文においては nice という語の背景にある意味の変化とその用法について、通時的な視点と共時的な視点の双方から考察した。もともと 'foolish, stupid' といった意味であった nice が現代の意味を獲得してくる過程を観察した。そこには、ある概念のある一面から別の一面へ、すなわち、一つのことが好ましくも疎ましくも解釈される、認知上の意味変化があった。例えば、細心で潔癖というのは、悪くすれば好みがるさく面倒くさいということであり、一方、良く言えば、細かいことによく気がつくということにもなる。特に、口語場面で用いられる nice のような評価的意味を表す語は、その内容的意味が時代とともにますます曖昧になり、使用者の主観を反映し、文脈に依存する傾向を強めることを明らかにした。

また、一人の作家においても、書簡と小説とで語の用いられ方に異なる点が観察されることを指摘し、意味変化の過渡期にある語について、文献学的成果による辞書の参照に加え、テキストタイプや個々の使用場面の文脈における解釈が重要であることを説いた。

(3) Jane Austen 研究会では注釈の作業に参加することでテキストの精緻な読みを他の研究者と確認し、辞書的記述、更に、より文学的な視点からの解釈を含め、語彙理解について貢献した。

(4) オックスフォードの各種図書館で18世紀以降の各種辞書、文学作品の各エディション、書簡等の資料により、当時の英語の背景を考察し、また、パースでは、当該分野に造詣の深い研究者によるセミナーにおいて、18世紀から19世紀の文学作品の文化的背景について知見を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

松谷 緑、英単語 nice の意味を探る：

Nice it does for every thing、山口大学
教育学部研究論叢、査読無、64巻第1部、2014、
165 - 172

〔学会発表〕(計6件)

松谷 緑、Emmaにおける理性・道徳・
感情に関する概念の表現、日本オースティン
協会、2014年6月28日、西南学院大学(福
岡県・福岡市)

松谷 緑、Emmaにおける mind と
condescension、山口大学英語学研究会、2014
年6月13日、山口大学(山口県・山口市)

松谷 緑、18 - 19世紀の英語語彙と
文体：理性・道徳・感情に関する概念の表現、
山口大学英語学研究会、2013年12月6日、
山口大学(山口県・山口市)

松谷 緑、18 - 19世紀の英語語彙と
文体：理性・道徳・感情に関する概念の表現
(1)高慢と偏見や分別と多感、山口大学英語学
研究会、2012年12月14日、山口大学(山口
県・山口市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

松谷 緑 (MATSUTANI, Midori)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：70259737